

## 終末期がん患者を看取る家族が活用する折り合い方法の検討

平 典子

日本がん看護学会誌 21 巻 1 号 2007

がん患者の家族が担う caregiver としての役割は、何らかの困難を伴って、がんの診断から死別後まで続き、とりわけ終末期における家族は繰り返す緊張状態を乗り越えるため、種々の対処方法を活用する。この研究は、終末期がん患者を看取る家族が活用する折り合い方法を明らかにすることを目的としている。

この研究での折り合いの定義：「終末期という状況に直面した家族が、葛藤を解決するために行う対処」

### < 研究方法 >

#### 対象者

1. 一般病棟の家族 10 人、緩和ケア病棟の家族 9 人の計 19 人。全員が女性。
2. データ収集・分析法  
半構成的インタビュー法と参加観察法によってデータ収集し、Krippendorff の内容分析法でデータを分析。

#### 結果

データ分析の結果、家族が活用している折り合いの方法として、下記の 7 カテゴリーとそれらを構成する 28 コードが明らかとなった。(表 1 参照)

#### カテゴリー

納得のための吟味  
受け入れやすさへの転換  
あきらめの作業  
負担の分散  
不一致を埋める接近  
面倒を避ける算段  
添い方を変える

#### 考察

明らかになった折り合い方法が看取りにおける葛藤の解決にどのような機能を有しているか

1. 状況や自分の行動を受け入れる
2. 面倒や負担から自分を守る、
3. 可能な添い方を試み

るの三つに分類。

#### 1. 状況や自分の行動を受け入れる機能

カテゴリー：

納得のための吟味、  
受け入れやすさへの転換、  
あきらめの作業、

納得のための吟味、受け入れやすさへの転換 は、状況や自分の行動を受け入れるための材料を求める戦略。家族が情報を求めてくるとき、求めている情報が家族にとってどのようなシンボルをもつのか、そこから家族が何を認めようとしているのか、この観点を見落とすことなく対応することが、家族の折り合い方法を促進し受け入れ機能をもたらす鍵。

あきらめの作業 の方法として、患者の人生を振り返るように思いを語る。患者の人生を回想し思い出を語る姿は、患者の死という未来が閉ざされた状態において、時間軸を過去の生に拡大しその閉塞感を乗り切ろうとする努力を表す。また、語りを通して患者の生を肯定的にとらえその延長線上に死を位置づけることによって、患者の死をその人の生き様として捉え直すことが可能となる。

## 2.面倒や負担から自分を守る機能

カテゴリー：

負担の分散、  
不一致を埋める接近、  
面倒を避ける算段

面倒と負担の解消・回避は、家族にとっては、無理なく見取りを継続するために、時として自分を守る戦略が必要になることを理解する。

## 3.可能な添い方を試みる機能

カテゴリー：

添い方を変える

家族は患者の変化に注目しながら、その変化に合わせてケアの方法やタイミングを変えて実施。変化に応じた方法を見出すためには患者の変化を実感せざるをえず、ケアしながら得られるこの実感が患者の死を受け入れていく原動力になる。

### <コメント>

看取りをする家族も患者と同じように様々なつらさを抱え援助を必要としている存在である。家族が活用している折り合い方法を理解することは、より効果的に折り合うことを促進させ、家族の葛藤を解決するための支援方法の示唆となると考える。